

# JICA 中国事務所ニュース

(2007年11月号)

## 1. 最近のトピック

### (1) 「JICA 長期研修員同窓会」山西省での ボランティア活動を実施

10月29日(月)に、「JICA 長期研修員同窓会」による貧困地域でのボランティア活動が行われました。

この同窓会は2007年3月に北京で設立された長期研修員の同窓会であり、これまで1年以上訪日した研修員約70名で構成されています。今回のボランティア活動は、同窓会の初めてのボランティア活動であり、理事長を始め、黒龍江省科技



庁、吉林大学、上海財経大学、海南省 CDC から合計4名の会員が山西省寿陽県に集まり、ボランティア活動を行いました。当事務所からは李瑾職員も参加しました。

この活動は山西省人民政府、寿陽県人民政府、寿陽県教育局の多大な協力を得ており、関係者に積極的に対応していただきました。寿陽県人民政府各関係部署のこのボランティア活動に対する期待は大きく、候成元副県長をはじめ、環境保護局、衛生局、教育局、人民法院、人民病院等14名の局長・院長が座談会に出席してくださいました。午前9時半から12時半まで同窓会会員は政府関係者と各分野における深い交流を行い、県側が直面している課題に対して、双方が率直に意見交換し、同窓会会員は関連の情報や事業化のための提案を提供しました。県側からは、同窓会の提案は参考とすべき点が多く、この活動は今後の寿陽県の発展に非常に有益であるとの評価を頂き、今後も同窓会メンバーに専門的な課題に対して、引き続き支援をいただきたいとの意思表示もありました。

その後、寿陽県教育局の手配により、郷鎮レベルの朝陽一中及び村レベル白家荘小学校を訪問しました。まず、各会員からは自己紹介、留学経験、真の日本・

日本人の紹介を行いました。学生の日本に対する関心は高く、現在の日本社会の問題に対して同窓会会員と熱烈な意見交換をしました。この訪問により、同窓会及び JICA や日本に対する理解が一層深まったようです。同窓会会員は学生に対して、将来故郷の発展に有益な人になるようにもっと努力してくださいという言葉で彼らを励ました。

寿陽県においては、石炭産業が主な産業であり、鉱山事故のため受傷、死亡した県民も多く、孤児も多いです。寿陽県朝陽一中を訪問した際、極貧の学生50名のうち、特に勤勉で優秀な中学三年生の呉嘉冕君に対して、同窓会会員の寄付で資金援助を行いました。同時に「知識は運命を変える」という言葉で呉君を励ました。呉君からは JICA 及び同窓会への感謝の言葉があり、将来ぜひ良い成績で大学に進学するという強い意思表示がありました。同窓会会員は今後も呉君に対する支援を行う予定です。

山西省は中国の中西部に位置し、比較的立ち遅れています。山西省の多くの地域は石炭資源が豊かですが、過度の採掘による環境汚染、資源枯渇等の問題が深刻になり、環境分野において政府及び各面からの支援が非常に必要になっています。今回のボランティア活動を通じ、長期研修員同窓会にと



っても、環境保護、医療、社会保障、弱者への支援等諸分野での協力の重要性を再認識させる契機となりました。

今回のボランティア活動の成功を元に、本同窓会としては貧困地域でボランティア活動を展開する意義が大きいとの認識を深めました。今後も同窓会会員の智恵、経験を一層活かし、中国の発展に貢献するよう、貧困地域において様々な支援を継続する方向を検討しています。

(相互理解班 李瑾)

## (2) 中国青年指導幹部訪日団が無事帰国！

中国共産党青年指導者の対日理解を増進するために実施される「中国青年指導幹部訪日団」一行 76 名が孫慶聚団長（中央党校副校長）のリードのもとで、11 月 7 日に訪日し、各省庁、経済団体との交流や企業、大学への視察訪問などを通じて見聞を深め、11 月 16 日に無事帰国しました。

当該研修プログラムは平成 12 年 8 月、日中両国の国家指導者の間で、中国共産党中央党校（党幹部の最高養成機関）の研修員と我が国官民の人材の相互交流を実施することで合意したものです。今回の訪日参加



河野大臣との会見

者は同校の青年幹部研修コースで長期研修中の中央・地方の政府機関等の若手幹部（局長クラス）で、東京での共同プログラムの後、分野別（行政、環境、地方開発）に別れて兵庫、福岡、北海道を訪問しました。

当該プログラムは今年で第 8 回目となりますが、昨年度と同じように、地方活動において日本人家庭を訪問するホームビジットも行われ、参加者にも大好評でした。帰国した団員からは一般市民とのふれあいを通じて貴重な体験を得られたことなど、相互理解をより深めることができたことが現場から伝わってくるような報告がありました。

また、11 月 12 日 2007 年度「青年研修事業」の「環境行政」「JOCV 日本



古賀所長と孫団長との歓談（大使公邸の歓送会）

語青年教師」グループ団員 10 人が北京に集り、訪日前のオリエンテーションと歓送レセプションに参加しました。これらの青年たちは全国各地から選ばれた優秀な青年で、それぞれの地方専門分野で、今後の中国の

発展において中心的な役割を担う人たちです。また「JOCV 日本語青年教師」訪日団の皆さんは日本青年海外協力隊員が活動している学校から推薦されました。この二つグループは、共に 13 日からの 18 日間日本を訪問し、「環境行政団」が鳥取県、「JOCV 日本語青年教師団」が富山県において講座や現場の訪問、日本の同世代の人達との意見交換、ホームステイ等を体験する予定です。

青年たちは 11 月 12 日丸 1 日間今回の日本訪問に際しての留意事項、日本の一般事情、JICA 事業の概況などいろいろな講座に出席し、出発前の準備に没頭していました。また、その日の夜には、盛大な送迎レセプションが開かれ、研修団員たちは熱のこもった合唱を披露してくれました。

中国の若い世代は安定した日中関係を築くという重要な責任を担っています。今回の訪問団が日本滞在期間中に、日本人といろいろな



歓送レセプション

場面で交流し、相互理解を深めることが期待されています。

青年研修事業は、1986 年に当時の中曽根首相が訪中した際に、胡耀邦総書記（当時）との合意に基づきスタートした事業であり、今年は二十周年の節目の年です。これまでに合計 4000 名を超える中国の青年が本事業を通して、日本を訪問しており、中日両国の相互理解と友好促進に大きな役割を果たして来ています。

（相互理解班 周妍）

## (3) 北京日本人学校へ協力隊員が出講

去る 11 月 10 日北京日本人学校にて、中国青年海外協力隊の看護師隊員と野球隊員が講義を行ないました。

講義の対象は中学 1 年生。「さまざまな人の生き方に学ぶ」学習の時間です。学習計画を見せてもらいましたが、計 5 時間の授業。1 時間目に「自分の将来の夢について考える。」 2 時間目に「1 時間目に考えたことをグループ

で発表しあう。」3,4時間目が「青年海外協力隊の方の話を聞いて、感想を発表しあう。」5時間目に「自分の具体的な将来像を描く。」というもの。協力隊の講義は各中学1年生達の将来像を描くための、重要な参考情報という位置づけです。



制服を着て講義を行う佐倉隊員

義をおこないます。講師を担当するのは湖北省孝感市中医医院で看護師隊員として活動中の佐倉未穂隊員と、新郷市体育運動学校で野球隊員として活動中の岩永清邦隊員。

しばらくすると、北京日本人学校中学1年生2クラス全員の約60名が集まってきました。また、当日は授業参観日でもあり、参観の親御さん達も教室に集まってきました。

まず、ボランティア調整員から青年海外協力隊についての簡単な説明を行った後、佐倉隊員、岩永隊員の講義が始まりました。それぞれ、時間は25分。この25分間で中学1年生の将来を考える話をしなければなりません。

まず、最初の講義を担当した佐倉隊員はナース服をはおり、ナースキャップを着けての登場。パワーポイントを使って、孝感語クイズや中国語の医療用語クイズ等で生徒の興味をひきつけておいて、どうして看護師になったのか？ どうして協力隊を選んだのか？ 孝感での看護師としての活動は

どうなのか？と話を進めていきます。「看護の現場では、新しい機材よりも、家族の愛が大切」と



活動の写真を見せながら話す岩永隊員

の説明に、女生徒がうなずいていたのが非常に印象的で

した。

佐倉隊員に続いての講義は岩永隊員。岩永隊員もプロジェクターで写真を見せながらの説明。野球隊員ということで、心なしか男子生徒の目が輝いてきます。岩永隊員も「生き方学習」での講義ということで、なぜ野球を続けてきたのか、大学で就職せずに協力隊を目指した経緯で始まり、新郷市で野球そのものだけではなく、礼儀や野球用具を大切にすることも教えていることを紹介します。ベースは玄関マットを切った物を使っていると写真入りで紹介した時には、「感心！」のため息がもれていました。

2人で50分の講義を終えると質疑応答の時間。講義を終えてホッとした2人でしたが、なかなか鋭い質問が待っていました。「青年海外協力隊になる試験はどのようなものですか？」「青年海外協力隊を辞めたいと思ったことはありませんか？」「中国で学んだ経験を今後どのように活かしていきたいですか？」などなど。ていねいに答えていた二人に生徒達も納得の様子でした。

会場には日本大使館の武隈書記官や国際交流基金の小西専門員など、いつも仕事で顔を合わせている方々が、いつもと違う「親」の立場で来校されていました。

さて、今日の講義。中学1年生の子供達の心にどのように残っていくのでしょうか？

(ボランティア調整員 古川寛)

## 2. 人の動き

### (1) 主な調査団 (派遣中・派遣予定) (10、11月)

中西部リプロ中間評価

(藤本団長ほか、計5名、10/7-10/20)

地震プロ事前調査 (三村団長 10/21-11/3)

甘肅省石羊河流域生態系改善開発調査事前調査  
(10/31-11/24 団長：塩野地球環境部T長)

## 3. 9月の主要行事

青年研修「環境行政」「JOCV日本語教師」

現地オリエンテーション (11/12~13)

## 4. 専門家・ボランティアコーナー

### 日本の印象 (その1)

中華人民共和国科学技術部の派遣により、2007年4月10日から8月23日まで、日本外務省と日本国際協力機構の出資による「電子政務推進のためのデータ

ベース・スペシャリスト課程」の訪日研修に参加しました。中国の公務員として、日本滞在中、とりわけ注目していたことがあります。それは、いわば「同業者」である日本政府の公務員たちが、日常どのように業務を行っているのかということです。総合的に見ると、日本の公務員たちの印象は、「まじめである」「効率が良い」「清廉潔白である」の3点にまとめることができます。具体的に言うと、まず、事務手続きが簡便化されており効率が良いと思いました。また、責任感を持ち、まじめに業務に当たっているという印象を受けました。今回は、特に印象に残った2つのエピソードをご紹介します。

### 1. 日本の首相にお会いして

4月15日、JICA 沖縄国際センター（OIC）に到着して2日目のことです。日本の安倍晋三首相に偶然お会い



することができました。「日本のナンバー1公務員」とも言うべき安倍首相という人物を知る良い機会となりました。

少し前に、重病患者の搬送要請を受けた自衛隊ヘリコプターが墜落するという事故が起こりましたが、安倍首相はその慰問のために沖縄入りしていました。それと合わせて、沖縄では自民党議員のために応援演説も行ったのです（安倍首相は自民党党首を経て首相に選出されています）。雨天にも関わらず、演説会場では多くの人々が彼を待っていました。NHKや地元メディアなども、早くからスタンバイしていました。まずは、沖縄の自民党議員候補者（女性）と幹事長ら数名が演説を行いました（残念ながら内容は聞き取れませんでした。興奮気味に、ひたすら感謝の意を伝えているのは分かりました）。午後2時ごろ、あたりが騒がしくなりました。議員候補の女性が、大きな声で何か叫びました。安倍首相が登場するのだな、と思いました。その1分後、2台の黒いクラウンが颯爽と会場前に停まりました。安倍首相は車を降り、選挙カーに登

りました。そして、会場の人々に向かって手を振り挨拶をしました。大雨にも関わらず、安倍首相は傘をさしていませんでした。



まもなく、安倍首相の演説が始まりました。日本に来て間もない私には、演説の内容は聞き取れませんが、周囲の人々は感極まっている様子で、首相の話に共鳴しているのが見て取れました。雨はひどくなる一方で、数枚写真を撮ったらその場を離れるつもりだったのですが、好奇心からそこに留まることにしました。これほど近くで日本の政治家を観察する機会が減多にないですし、このように大きな活動をどのように組織・管理しているのか見てみたかったからです。やがて、安倍首相は車を降り、会場の人々と握手を始めました。私は、後ろのほうで写真を撮っていました。なんと安倍首相は、私のところにまで歩み寄ってきて、握手をしてくれたのです。ひとりの中国人として、「ナンバーワン公務員」である安倍首相のことを理解した気がしました。安倍首相は政治名門一家の出身です。しかし、総合的に見て、「庶民的な政治家」という感じがしました。気さくで、穏やかな方だと思いました。私はこれまで海外に行ったことがないばかりか、安倍首相のような政府高官にお会いしたこともありません。しかし、今回の出来事を通して、日本が戦後、早々と復興を遂げた要因のひとつを垣間見た気がしました。

私は警務部門で働いているため、警備員の動きにも注目していました。警備員は15人足らずでしたが、その効率の良い仕事ぶりには驚きました。また、集会が行なわれたのは道路の十字路部分で交通量も多かったのですが、日本の首相が来たからといって交通規制を行なうわけではありませんでした。配置された警察が交通誘導を行なっているだけでした。上空にはヘリコプターが飛び、ビルや陸橋の上などから監視を行う警備員もいましたが、すべてのプロセスが秩序良く行な

われていました。警笛やラッパを鳴らすようなこともありませんでした。そして、集会が終わると、警備員たちはサッとその場を離れました。特に意識しなければ、彼らの存在に気づくことはなかったでしょう。

## 2. 日本公務員の時間に対する観念・プロセスに対する意識

日本の公務員たちの基本業務について知りたいと思ひ、沖縄国際センターがある浦添市の市役所へ足を運



びました（日本の市役所は、中国の市政府にあたります）。効果的にリサーチを行うため、

試しに日本での学習証明を発行してもらうことにしました。市役所には、午後12時40分ごろに到着し、まず、該当カウンターの窓口にいる職員に尋ねてみました。職員は女性で、コーヒーを飲んでいるところでした。彼女は私を見るなり、日本語で何か言いました。そして、立ち上がって、日本語で書かれた看板を指差しました。私が英語で話しかけると、彼女は日本語で「少々お待ちください」と言いました（この言葉は聞き取れました）。2分ほど経ち、英語の出来る職員が出てきました。その職員の説明で分かったのですが、彼らの午後の業務は1時から始まるのだそうです。看板には、そのことが書かれていたというわけです。時計を見ると、12時55分でした。1時まであと少しなので、待つことにしました。やがて、コーヒーを飲んでいた窓口の女性職員がやってきて、業務再開を伝えてくれました。時計を見ると12時59分でした。私がカウンターの前に移動すると、ちょうど業務再開を知らせるアナウンスがロビーに響き渡りました。そして、5分で証明は発行されました。説明にはトータル10分かかっているのに、実際の手続きに要した時間はたったの5分でした。このことで日本人の時間に対する観念、そして、プロセスに対する意識が分かった、印象的な出来事でした。私を含む多くの中国人にとって、こうした彼ら

のやり方は、「融通が利かない」「きちょうめんすぎる」という感じがしますが、あとでOIGの講師にそれを話したら、逆にこのようなことを言われました。「規則を決めても、それを厳格に守らないのであれば、何のための規則なのですか？」。

小さなことではありますが、大変印象に残るエピソードでした。彼らの厳格すぎるほどの業務態度は、私を含める中国の公務員も見習うべきではないでしょうか。

このほかにも、おもしろい気づきがありました。日本の市役所の建物は非常に立派なのに、公務員たちが使っている椅子や机などの設備は非常に古いのです。ボロボロになっているものもありました（例えば椅子とデスクなど）。最初は節約のために古いものを大切に使っているのかと思いました。しかし、あとになって知ったのですが、政府の予算は市民の税金でまかなわれているので、もし市役所の設備が新品で揃えられたら、市民

たちから「税金の無駄遣い」と抗議されてしまいます（もちろん、節約も要因のひとつだそうです）。



## 3. 自衛隊中央楽団の街角コンサート

2007年7月17日、東京へ行ったときのことで、昼食後、集合時間まではまだ30分ほど時間がありました。そこで私は、あたりを散策することにしました。普通の日本人が日常どのように生活し、どのように仕事をしているのか観察してみたかったからです。偶然、自衛隊中央楽団が路上で無料コンサートを行なっているのを見かけました。珍しかったので、見ていくことにしました。私が腰かけると、自衛隊の隊員がやってきて、チラシと演奏曲のリストをくれました。チラシによると、彼らはすでに2枚のアルバムを発表しており、現在3枚目のアルバムの準備に入っているそうです。交響楽のことはよく分かりませんが、若い隊員た

ちの演奏というのがウリになっているようです。その後、コーディネータや日本滞在の中国人たちと話して分かったのですが、この楽団は中国で言うならば中央軍楽団にあたり、活動費は市民の税金によってまかなわれているそうです。ですから、彼らはそれを社会に還元する必要があります。このような無料コンサートもよく開催しているようで、こうした活動を通して、「みなさんの税金を無駄に使っているわけではありません！」とアピールしているようです。一方、アルバムが売れたら、国の負担を軽減することもできると思いますが、最近では、中国政府も同様の活動を行っています。たとえば、私が所属する西安市公安局では「警察開放デー」などのイベントを行なっています。

総合的に見て、日本の公務員のサービス意識は比較的強いと思いましたが。なかでも、納税者に対するサービス意識はとりわけ強いと感じました。研修日程が詰まっていたた



め、大雑把な認識しか書くことができません。しかし、限られた時間の中、日本の公務員の日常業務について基本的に理解できることを期待しています。

(帰国研修員 席雲斌)

## 5. 中国の動き

### 中日文化・スポーツ交流年終了イベントの開催

今年は「中日文化・スポーツ交流年」ということで、これまで約1年間にわたって、さまざまな文化交流やスポーツ交流イベントが行われてきましたが、11月18日(日)に、早くも中国側主催の閉幕式が、東京において開催され、約2000人の中日各界の友好人士、日本の高校・小中学校の教員と生徒、留学生代表が出席しました。

崔天凱日本国駐在中国大使はこの閉幕式で國務院の温家宝総理の祝辞を代読し、「ここ一年来、『中日

文化・スポーツ交流年』では約300の豊富なイベントが催され、両国民の相互理解を大いに深めた。文化とスポーツの交流はゆっくりと流れる溪流のように、人びとの心を潤し、国民の心の中に植えつけられた友情の木を常緑の木に変えることになった」とこの一年の活動を振り返りました。

引き続き、日本の岩城光英内閣官房副長官が福田康夫首相の祝辞を代読し、当面、日中両国は戦略的互惠関係の構築を目指し、アジアと世界の平和、安定と発展のために、諸分野の協力



中央テレビ(CCTV)の銀河少年テレビ芸術団による踊り  
(\*注:男の子です。)

をくりひろげており、この文化・スポーツ交流年は両国民、特に青少年のために交流の機会を提供するものであり、両国民の相互理解は大いに深まったことから、この好ましい勢いが引き続き継続できるよう期待していると述べました。

さらに、中国文化部の于幼軍副部長は中国側組織委員会を代表しての挨拶の後、「日中文化・スポーツ交流年日本側実行委員会」の御手洗富士夫委員長と日中文化交流協会に「文化交流貢献賞」を授与し、その後、中国青少年芸術団が素晴らしい公演を披露したそうです。

今月末には、北京において日本側主催の閉幕式が、人民大会堂において開催される予定です。そこには、ユーミンや谷村新司など、非常に有名な歌手やタレントが多数参加するそうですので、きっと北京での閉幕式も大変盛り上がることでしょう。なお、日中文化・スポーツ交流年の活動はこれらの閉幕式でいったん区切りがつけられますが、引き続き12月までさまざまなイベントが開催される予定です。

## 6. その他のお知らせ

\* 専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所沈 曉静 (shenxiaojing.cn@jica.go.jp) へてお願いいたします。